

1-10					
主題		認知症ケアにおける尊厳の保持			
副題		レビー小体型認知症 A さんの自立支援について			
キーワード 1	尊厳の保持	キーワード 2	レビー小体型認知症	研究(実践)期間	22ヶ月

法人名・事業所名	社福) 台東区社会福祉事業団 東京都台東区立特別養護老人ホーム谷中
発表者(職種)	三浦志帆(介護職員)、中村潮音(介護職員)
共同研究(実践)者	小野田祐也(相談員)、清木智恵子(管理栄養士)、山田明音(看護師)

電 話	03-3824-1094	FAX	03-5685-3596
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	当施設は平成元年5月に開設しました。定員は56人(内、ショートステイ6床)です。台東区谷中地域の方々との仲間として存在できるよう「やなかまケアシステム」と称し、その頭文字をとって、①やすらかで、②なごやかな居心地、③科学的根拠に基づく支援、④街と共に歩む、という運営方針を掲げています。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

Aさん(71歳 女性 要介護度5 レビー小体型認知症)は、平成29年9月、グループホームから当施設に入居した。入居時の体重は、適正体重と比較すると13kgも低い状態であった。表情は硬く、意思疎通は困難で、ADLは全介助、褥瘡も発症していた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

Aさんの尊厳を回復すべく、レビー小体型認知症の特徴である、日内変動等の症状に適した支援を実践し、低栄養状態を起因とした廃用症候群の改善を目指した。

《3. 具体的な取り組みの内容》

研究期間は、平成29年9月から令和元年6月で、下記の4つの支援計画を多職種で実践した。

①低栄養状態の改善(褥瘡の改善)

多職種チームで、低栄養改善のための計画を策定した。計画の柱は2つで、「栄養強化支援」(栄養補助食品の活用等)と、「食物認識支援」(食事の開始には、甘いものや冷たいものから介助する等)を実践した。また、2週間から1か月ごとに支援内容のモニタリングを行った。

②精神科薬の調整による精神状態の改善

精神科医(配置医)による脳のCT検査等で、過鎮静気味であることがわかり、平成30年4月まで精神科薬の調整(減量等)を図った。また、同年9月には、眠剤の内服時間を就前から夕食後に変更した。

③レム睡眠行動障害の支援

パジャマを着ることで睡眠が改善されたという民間機関の実験結果を参考に、平成30年11月よりパジャマへの着替えを開始した(更衣介助への抵抗が強かったため、パジャマへの着替えは精神状態が安

定するまで留保していた)。Aさんは発汗が著明であるので通気性のよい素材にした。

④歩行訓練と排泄支援

低栄養状態での運動は、筋肉量が減少してしまうおそれがある。そのため、歩行訓練は低栄養状態が改善されはじめた平成30年10月より、トイレでの排泄支援は同年11月より開始した。

《4. 取り組みの結果》

①低栄養状態の改善

入居当初に比べ、体重は約6kg増加し、栄養状態の指標となるBMI値は正常となった。褥瘡は平成31年4月に完治し、低栄養状態のリスクは高リスクから低リスクへと改善した。

②精神科薬の調整による精神状態の改善

平成30年6月より、過鎮静気味は緩和され、精神状態は安定的になった。

③レム睡眠行動障害の支援

パジャマへの着替えを開始後、不眠の頻度は月平均11日から3日に減った。

④歩行訓練と排泄支援

平成30年8月より、車いす上で体幹の保持が可能になった。同年9月からは、車椅子から椅子に変更し、その月末には、背もたれなしでも座位保持が可能となった。そのため、同年10月から歩行器で歩行訓練を開始し、日に1回程度はトイレでの排泄も可能になった。

《5. 考察、まとめ》

Aさんの自立支援にあたっては、成年後見人(娘)との情報共有(ニーズの把握)を軸にして支援を展開してきた。結果、上記の4つの支援が有機的に結びつき、AさんのQOLは向上した。専門性とは、尊厳の保持を絶対的な価値とすることを改めて認識し、本事例のような実践の積み重ねが科学的なケアに繋がることを実感した。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し同意を得た。

《7. 参考文献》

「レビー小体型認知症介護ガイドブック」(2014)レビー小体型認知症家族を支える会

「認知症サポーター活動ハンドブック」(2016年3月)公益社団法人全国国民健康保険診療施設協議会

「食生活に要注意 一高齢者の低栄養はキケン」(地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター)

<https://www.tmghig.jp> (2016年7月閲覧)

「超高齢者における栄養ケアの役割～サルコニア・フレイル・認知症と戦うために～」(2009)吉田貞夫

「効果的な筋肉量の増加に「ミルクプロテイン」が高齢者の筋肉量維持・増大を助けることを発見」

(株式会社 明治) <https://www.meiji.co.jp> (2018年8月閲覧)

「パジャマ離れが快眠を妨げていた」(日経ビジネス)

<https://business.nikkei.com> (2018年10月閲覧)

「健康づくりのための睡眠指針」(2014年3月)厚生労働省健康局

《8. 提案と発信》

認知症にはいくつかの類型があり、類似した症状があれば、そうではない症状もある。そのため、認知症ケアは、自己決定を根本に据え、個別具体的な支援を多職種で展開することが重要である。